



大衆社会における人間性 : アドラーとヤスパースの比較思想

著者	吉田 真哉
雑誌名	倫理学
巻	35
ページ	93-102
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00157174

大衆社会における人間性

— アドラーとヤスパースの比較思想 —

吉田真哉

はじめに

アドラーとヤスパースは人間の共同性について探究し、その成果を報告している。この問題をめぐりアドラーの関心が収斂されるのは、共同体感覚 (Gemeinschaftsgefühl, social interest) が弱まっているために他者との関係から逸脱した人間の治療である。これは確固とした価値基準が前提されている。アドラーは共同体感覚に価値を認めている。共同体感覚の有無が、健全な社会生活に直接的な影響を与えるためである。これに対してヤスパースは価値区分に慎重な態度を保ちつつ、大衆からの飛躍について実存哲学の観点に基づきながら明らかにしている。この大衆から実存への飛躍を倫理的な善や適切さを考慮した解釈は十分に可能であるにせよ、しかしここには一定の注意が必要である。ヤスパースは大衆的生を退廃 (Verfallen) と関連づけている。「精神性は、大衆に拡散することで退廃する」[Ja31, 102]。この退廃という表

現に込められたニュアンスが優劣とは無関係であると断定することはできない。かれが精神性や教養に価値を認め、大衆をこれらと対置しているからである。しかしこれと同時に、ヤスパースは大衆的な生を「生活条件」[Ja31, 37]とも見なしている。このことから大衆は全面的に否定されているわけではなくなり、かれの大衆観を理解するには一定の注意が必要となる。

さてヤスパースの関心は、大衆から実存への飛躍の仕方の解明にある。大衆への退廃が日常的に陥りやすいのに対して、大衆から実存への飛躍には困難が生じる。この点でアドラーとヤスパースは近い思考を示している。他人への不信任感が強まった結果として共同体感覚が弱くなるのは日常的に起こりやすいのに対して、一度弱まってしまったこの感覚をふたたび回復させるのは困難であると、アドラーも考えているからである。

ヤスパースの大衆批判は実存哲学の樹立のための立脚点にもなっている。ただしかれば、実存を普遍的な善や当為と見な

しているわけではない。大衆と実存の対置は、人間性と非人間性の区分に従っている。「系統化された大衆も、なんどでも非精神的となり非人間的となる」[Las31, 37]。人間性と非人間性の区分は価値的ではなく事実的である。この区分にもとづき、ヤスパースは大衆から実存へ飛躍するための方法について考察している。そしてヤスパースはこの飛躍の方法のひとつとして、交わり(Kommunikation)の哲学を敷衍している。

アドラーも人間性をめぐる危機意識という点でヤスパースとおおくの理解を共有している。しかし大衆問題にかんじていえば、アドラーの態度は中立的である。なぜアドラーは大衆というあり方に危機意識を抱かなかったのか。この問いは大衆を問う是非の問題を翻って掘り起こす。

ル・ボンやタルド、シゲレの群集心理学の頃から顕著化した大衆批判には、ヤスパースやハイデガーの実存哲学も広く共有する観点が前提されている。しかしこれらの弟子のアールントによるアイヒマン裁判の報告からミルグラム実験の結果報告を経由することで、大衆を素朴に問題視する観点こそ、むしろ問題のとさえ考えられるようになった。またフェスティンガーの認知的不協和の理論によって、人間の合理化が心理的葛藤に対する作為的な納得や正当化でもあることも明らかとなり、大衆批判の厄介さがここにおいても示唆されている。個人的な信念や確信が世間的な常識と対立する場合、われわれは日常的に、極端な理由づけを

たやすくおこなってしまう。群集心理学により始まった大衆批判の観点は、皮肉にも、この学的发展としての社会心理学によって、その批判の難しさを突きつけられたといえる。

この難しさは、次の定型的な決めつけのなかに潜在する。「他人と意見が衝突した場合、この意見対立による不安を落ちつかせるために、強固な自己正当化が試みられる。そしてこの正当化は、似た意見に接触することでより盤石となる。ゆえにわれわれは対立する意見をもった場合に、自身とおなじ意見をもつ者に接することで安堵する。不安感がより効果的に鎮静するためである」。こうした決めつけこそが、わかりやすい図式化を遂行してしまっていることは否めない。翻って大衆批判の難しさとは、大衆を批判する者自身が大衆的な言説を繰り返り広げること、大衆を再帰的に再生産してしまう点に見いだせる。しかし科学技術の社会的な取捨選択をめぐるトランス・サイエンスの問題領域や、ポピュリズム政治をめぐる問題圏等、大衆は現代においてもなお問題である。

ここではアドラーとヤスパースの比較を通じて、大衆の問題について考察したい。順序は、アドラーの共同体感覚を明らかにしたのちに、ヤスパースの交わりの哲学について明らかにする。以上の明確化を通じて、大衆の問題のひとつの結論として、現在のな生を相対化させる歴史(教養)の意義について展望したい。

1 アドラーの個人心理学

アドラーは自身の心理学を個人心理学と呼んだ。個人心理学の要点は共同体感覚にある。そしてこの感覚と連動して人間の劣等感と優越感の作用が考慮されている。

劣等感にかんして、この感覚に苛まれる状態についてアドラーは詳述している。この苦しみは人間の幼少期より始まる。幼少期の頃、ひとは大人たちに囲まれながら大人たちとの比較を通じて、自身の劣等性を身にしみて感ずる。大人たちにはできることが自身にはできないという事実が、ここでの劣等性への感覚を支える。この感覚が劣等感や無能力感にふかく関係する。アドラーは劣等感そのものを否定的に捉えているわけではない。「あらゆる者の心的な生の始まりには、多かれ少なかれ深い劣等感があると認めなければならぬ。これは、子どものあらゆる努力をひき起こし、この努力を育てる推進力であり、そして目標のために必要な推進力である」[Adl07, 72]。劣等感を抱くからこそ、われわれは克服のための動機を獲得する。

しかし共同体感覚を欠いた劣等感については、劣等コンプレックスという名称が与えられかなり否定的に捉えられる。劣等コンプレックスとは過剰な劣等感であり、人間関係へのためらいの態度の原因となる心の状態である。「劣等コンプレックスが顕著になると、敵国で生活している感覚を抱くようになる。そしていつ

も他人の利益よりも自分自身の利益を思案し、適切な共同体感覚をもたなくなってしまう」[Adl69, 30]。ひとが劣等感を歪ませてしまうと、これと同時に他者への不信感も強めてしまい、人間関係の構築の努力を放棄するようになってしまう。ここでの問題は、自閉的な態度の強化をめぐる負の連鎖にある。他者への不信感が強いからこそ閉じこもりがちな態度になりがちな者は、この閉じこもりという態度を正当化するために、他者への不信感や恐怖感をますます強めてしまう。この正当化は、他者と関係しなければならぬという常識を強く意識すればするほど、自閉的な事実への感覚の葛藤の補填として強力に作用する。

劣等コンプレックスが膨張していくのに応じて、優越コンプレックスも増大していく。劣等感と劣等コンプレックスの関係と同様、アドラーは優越感そのものを否定しているわけではない。優越感の追求は目標到達のための努力に不可欠な心のエネルギーである。劣等コンプレックスが拗れて共同体感覚が弱い状態で見られる優越感が問題であり、これは優越コンプレックスと表現される。「劣等コンプレックスを抱く者が苦難から逃れる方法のひとつが、優越コンプレックスである。この者は、実際はそうではないのに、自身が優れていると決めつける」[Adl69, 31]。アドラーがこの優越コンプレックスを問題視する理由のひとつは、この心の傾向が犯罪行為へ結びつきやすい点にある。ひとを騙すことで偽りの誘導をする際に抱かれる他者の支配という快感、窃盗

による他者を出し抜いた際の快感、他者が躊躇するような行動を躊躇せずに行うことができる自身への錯覚的な特別視による快感、これらの快感は他者よりも優れていたという欲求を満たした結果でありながらも、実情は人生の現実的課題からの逃避的選択の帰結である。アドラーにとって犯罪行為とは、人生の課題からの逃避と欲求の充足の確保を独善的に両立させた選択の帰結である。

劣等感にせよ優越感にせよ、これらに共通して問題的存在であるのは共同体感覚の欠如である。以下ではこの共同体感覚について明らかにしたい。人間は「共同体」[Adl07, 43]において生存する動物である。「あらゆる者がひとの手助けをするという課題をもち、ひとに結びついていると感得しなければならぬ」[Adl07, 47]。この必要に基づく結束感こそが、共同体感覚である。ひとを策謀的な者ではなく友愛的な隣人と捉えようとする態度は、猜疑心ではなく信頼における他者への構えによって整えられる。こうした態度によって健全な人間関係が形成される⁶⁾。したがってアドラーは、「この共同体感覚を十分に備えた人間を「理想像」[Adl07, 46]と捉えている。

さて、こうした共同体感覚の欠如による問題をアドラーは集団的視点からも考察しており、これを大衆の問題と重ね合わせている。「個人的な問題と大衆の問題を理解するための重要な鍵が、いわゆる劣等感、劣等コンプレックス、そしてこれらの帰結である」と、個人心理学は把握してゐる」[Adl13, 105]。これはニュー

ヨーク・タイムズで発表された記事である。この記事では「科学技術」[Adl13, 105]の脅威と「戦争」[Adl13, 106]の問題が考慮されるながら、大衆について論じられている。ここでのかれの立場は、大衆そのものを批判的に捉えているわけではない。問題は連帯感を欠如させた集団である。「連帯感の欠如は、膨張した劣等感のためにつねに、個人をノイローゼや犯罪へと駆り立て、諸々の集団や国家を自滅という奈落へと駆り立てる」[Adl13, 106]。ここでの連帯感という語は、共同体感覚にかなり近い意味をもつ。そしてこの自滅という奈落の具体例としてアドラーは戦争を思い描いている。アドラーはこの記事のなかで、大衆 (mass) と集団 (group) と群衆 (crowd) をほぼおなじ意味で使用している。かれにとって大衆そのものは問題視されず、かれの立場は一貫しており、問題はむしろ共同体感覚の強弱にある。

アドラーはあらゆる集団を肯定的あるいは中立的に捉えているわけではない。たとえば「ギャング (gang)」[Adl69, 110]について言及される場合、この集団はかなり否定的に評価されている。しかしこの評価も、共同体感覚を弱めた帰結としてギャングの成員が生じ、この成員は他者への関係をもとうとする勇気を失っているという想定に基づいている。したがって、ここでもやはり共同体感覚の強弱に問題は収斂される。このことから、たとえば自身の死といった実存的に切迫した問題から逃避するために喧騒へ身を投じた者として、アドラーは大衆の成員を捉えていない、と

いうことになる。

なぜ大衆という集団そのものをアドラーは否定的に捉えなかったのか。まずはアドラーの生涯から、この問題にアプローチしてみたい。アドラーは医師として開業する以前から、そして医学者として知的活動に従事する以前から、政治的信念のもとで活動していた。「ポリクリニクで貧しい患者への医療は広大な政治的展望の反映であった。1890年代半ばに、かれは社会主義に強く傾斜したのであった」[Ho194, 22]。「医師の特別な役割として社会活動家と社会改革者を強調したこの著書(アドラーの最初の著書)は、後のかれの展望の兆しであった」[Ho194, 37。「」内筆者挿入。実際のところ家族の眼には、アドラーは次のように映っていた。「父は自身を普通の者のひとりと見なし、知的エリートの一員とは考えなかった。詳説された内容は、おおくの哲学的、心理学的、社会学的な定式化と複合概念によるものであるにもかかわらず、あらゆる者が理解できるように、平易な言葉の使用につねに努めていた」[Ho194, xi]。こうした事情によって、否定的なニュアンスで大衆という語を用いることに、アドラーは躊躇したのかもしれない。大衆という決めつけは、読者や聴衆の拒絶的な態度を硬化させる危険が生じてしまう。大衆を批判視する背後には、上下関係が漂いやすくなってしまうからである。こうした空気の察知は、批判される側の方が敏感である。

アドラーの方法的態度も、この問題に影響していると考えられ

る。アドラーが重視している方法は、法則定立的であるよりも個性記述的であると広く指摘されている[K199, 138]。したがってかれは個人的な各自的事情の理解を重要視する。「与えられている条件がおなじでも、個人が犯す過ちは多種多様である。子どもたちを調べると、彼らの反応に絶対的に固定化された正しい流儀などないことがわかるだろう。かれらはかれら自身のやり方で反応する」[Ad169, 21]。このことから、「大衆」という一般化によって大衆の成員の個人的事情を見落してしまう危険を、かれは回避しようとしたのかもしれない。かれにとってこうした一般化は、劣等コンプレックスや優越コンプレックスといった一般化と決定的に異なり、適切な他者理解にとつてむしろ有害的であったと考えられる。

いずれにせよアドラーの視点に立つと、大衆を批判的に捉えようとする学的な試みこそがむしろ問題となる。しかしそれでもやはり、大衆は批判されるべき問題を抱えている。以下ではこの大衆の問題をめぐる、ヤスパースの実存哲学における交わりの哲学を確認することで考察したい。

2 ヤスパースの実存哲学

おおくのヤスパース研究者が指摘するように、交わりの哲学はヤスパースの実存哲学の核心的部分である。「人間相互の交わり

の問題は、ヤスパースにとって最重要の関心事である」[Sa185, 72]。かれの大衆論もこの交わりの哲学とふかく関連している。ここでは、この交わりの哲学を確認しながら、かれの大衆論について取り扱ってみたい。

ヤスパースは人間の相互的關係を交わりの概念によって描写する。交わりは現存在の交わりと実存的交わりに大別される。現存在の交わりは、原初状態の交わり、意識一般の交わり、そして精神の交わりへとさらに区分される。そして大衆としての人間關係は、「原初状態」[Jas32, 51]の交わりにおいて論じられている。

原初状態の交わりについて、ヤスパースは次のように特徴づける。「素朴な現存在における私のおこないは、みんながおこなうことであり、みんなが信じるものを信じ、みんなが考えることを考える」[Jas32, 51]。自身の思考や行為に理由づけが試みられる際、周囲の、あるいは空想上の「みんな」との同調に正当性が見いだされる場合がある。こうした他者とのかわりが原初状態の交わりである。この原初状態の説明の箇所では、タルド、ル・ボン、レヴィイブリュール、プロイスへの参照指示が与えられており、ここでの説明はかれの大衆論と一致する。「人間は大衆に所属しており、大衆は人間を「われわれみんな」という修辭と騒動へ沈ませようとおびやかす」[Jas31, 37]。この事態が脅威である理由は、「疑う余地のない同一化」[Jas32, 51]に見いだされる。第三共和政時代のフランスで頻発した暴動を理解する試みとし

て発達した群集心理学と同様、ここでヤスパースが念頭に置いているのは、同一化による偽りの自明性を盾に取った大衆的騒動である。

意識一般の交わりは、「みんな」との同一化から独立した個々人間の交わりである。「独立的自我の離別後の問題は、自我と自我がいかにして理解しあひ、互いに交渉するのかわり」[Jas32, 52]。ここでの交わりは、他者の自我、すなわち他我を非人格的に捉えたり、独立の自我として承認したり、そして事物的に取り扱ったりする。「あらゆる自我は他我によって原則的に代替可能であり、あらゆる自我は交換可能である」[Jas32, 52]。この論点は大衆の問題とおおきく重なりあっている。「装置 (Apparat)」[Jas31, 31]を軸とした社会の機械化に応じて、大衆は現代社会に出現するようになったとヤスパースは見なしている。この装置は、社会の分業や組織化を成立させた産業革命以後の社会原理を表示する概念である。産業革命以後の市民社会にふかく根づく装置は、他方で合理化を推進し、人間を社会の部品へと還元させる。もちろんここでの交わりは、近代だけに固有的な意識に立脚しているわけではない。古代であろうとも、たとえば力仕事が必要な場面において、これに必要な筋力を備えていれば誰でもあつても構わないという他者への意識の構えが、ここでは指摘されている。しかしこの意識が顕著になるのはやはり、近代以降の時代である。この交わりにおいては他者を手段として取り扱おうとする傾向

によって、「人格的なかかわり」[Jas32, 52]が困難となる。

精神の交わりは、理念に共同的に導かれた人間関係を指示する。この交わりによって生きる意味がもたらされる。「もつぱら理念へ参与すること」で「生の」中身を満たすことのできる」[Jas32, 53。「」内筆者挿入」。この理念は客観的な形態に宿る魂に等しい。「全体としての理念のもとでの共同体——この国家、この社会、この家族、この大学、そしてこの職業——が初めて、わたしを内容豊かな交わりへもたらす」[Jas32, 53]。換言すれば、理念なき国家や共同体、学業や仕事への参与や従事は空虚である。こうした組織や共同体は、理念に導かれる個々人の自覚によって、それへ参与する者に充実感を生じさせる。この充実感是自己への同一化に応じてますます強まる。このことからたとえ極めて過酷な環境や状況であろうとも、そこに理念を感じ取ることができれば、ひととは濃密な結束や団結を可能とし、充実感に満ちた活動を遂行できるようになる。ここで無視できない問題は、この精神の交わりが個別的な自覚に立脚している点である。個人が意識的に他者と分離し、個別化されたうえで理念の参与でないならば、これは大衆的な同調であり溶解である。このことから精神の交わりは、意識一般の交わりを媒介していなければならない。

こうした現存在の交わりに対して、実存的交わりは自己を実現させる交わりである。精神の交わりが充実感を生じさせるものであっても、ここでの自分自身への「同一化」[Jas32, 53]は不完全

である。ヤスパースにとって自己の実現や同一化は、他者との関係においてはじめて成立する。現存在の交わりは客観的な交わりであり、他者との「絶対的な親近」[Jas32, 54]を問題にしない。したがってここでの人間関係においては他者との親近に限度が横たわり、これに応じて自分自身への同一化にも制限が課せられてしまう。実存的交わりにおいて取り扱われる問題は、現存在の交わりでは抜け落ちてしまう、この絶対的な親近の有無である。

実存的交わりについてヤスパースは広範かつ詳細に論述している。ここでは大衆をめぐるアドラーとの比較という文脈上、この交わりの過程としての愛しながらの闘争に焦点を絞りたい。この交わりの過程を考察することで、大衆の同一化に対する差異化の役割を鮮明にし、さらに闘争関係の実存的意義について確認したい。

他者との絶対的な親近を可能にする実存的交わりの過程は、「愛しながらの闘争 (Liebender Kampf)」[Jas32, 65]である。素朴な結合は「盲目的な愛」[Jas32, 65]であり、大衆における同一化に近い。愛しながらの闘争は、他我の独立を保ち尊重しながらの親近である。この闘争は独自の様式を備えている。「実存をめぐる闘争にとって重要なのは、徹底的な公明 (Offenheit)」、あらゆる権力や優越の排除、自己と他者の対等である」[Jas32, 65]。ここでの徹底的な公明においては、言語的な過程が具体的に想定されている。すなわち一連の問いかけと応答である。問う行為が自

分自身の存在を明らかにするのと同様、答える行為もまたその存在を明らかにする。こうした問いかけは、他者を委縮させたり、他者を辟易させたりする類のものではない。「闘争は同等の水準で生じるのだから、闘争のうちにはすでに承認があり、問いかけには肯定がある。これゆえ実存的な交わりは熾烈な闘争においてまさに連帯感が明らかとなる。この闘争こそが、分離することに代わって、実存を真に結合する方法なのである」[Pag. 60f]。この闘争が愛しながらの闘争である理由が、この引用文には含意されている。この闘争は相手の独立を認める。しかしこれは相手と離反するためではなく、むしろ接近するための行為である。ここに大衆における同一化と決定的な違いがある。大衆における同一化が自己と他者の独立性を相互に溶解する癒着であるのに対して、実存的交わりは独立性を保持した結合である。こうした問う行為、すなわち哲学に、ヤスパースは人間の可能性や人間性を見いだしたのであった。そしてこの愛しながらの闘争という過程における問う行為にこそ、大衆から脱却する糸口が、ひいては人間らしさ(可能的実存)が見通されるのである。闘争において、関係を結ぶ相手の独立性を尊重しながら、さらに連帯を結ぶための親しみの契機を見いだすことができる。ここには人間は個性をもつからこそ、それぞれ異なった存在であるという認識が前提されている。したがってこうした差異を度外視した大衆的な同調こそ、圧力であり、強圧であり、暴力的ということになる。ヤスパース

の大衆批判の意義はここに存する。

おわりに

アドラーとヤスパースの大衆をめぐる人間関係のそれぞれの立場についてまとめておく。アドラーは大衆を中立的に捉え、人間を仲間と見なす態度を重要視した。ヤスパースは大衆を批判的に捉え、愛しながらの闘争に人間らしさを見いだした。一見すると、前者が融和的な関係を尊重するからこそ大衆に中立的で、後者が独自の対立的関係に意義を見いだすからこそ大衆に批判的であると捉えることができるかもしれない。しかしこの図式化は不適切である。

アドラーは大衆という語を、集団とほぼおなじように捉えていた。したがって大衆であろうとも仲間意識に立脚した態度が保持されていれば、否定的に評価されはしない。このことは、たとえばギャングのように人生の課題から逃避した結果の集団であれば、厳しく批判されることを含意する。そしてこの批判的な見解はヤスパースにも共有されている。大衆という語に込められた評価が異なるだけで、逃避的な人間関係に対して厳しく批判する点で両者は一致している。換言すれば、アドラーがヤスパースの視点に立てば、かれもまた大衆を批判せざるをえないということになる。またヤスパースにとって闘争はあくまで手段である。目的

はむしろ連帯であり、この点も、アドラーにかなり近い立場を示している^②。残された問題は、大衆という語に込められた意味の相違の理由である。

大衆とは歴史的文脈を背景とした社会的な所産である。大衆社会は「マス・メディアの発達」と「機械的技術の出現」によって準備された[Frk01, 188]。やがて、人間の行動を把握する際、アドラーは目的論に立脚した人間の歴史性を重要視している。しかしこれは個人的領域に限定されている。これに対してヤスパースは集団の歴史性も重要視しており、この差が大衆理解の違いに大きな影響を及ぼしている。大衆について論述している箇所、アドラーも集団的な歴史が個人へおよびず影響について言及している。たとえばそれは「帝国主義的動向」[Ad113, 106]である。国家間の集団的な劣等コンプレックスの補填として、参戦論が活発になる際の個人への圧迫について、アドラーは見落としているわけではない。しかしそれでもやはり、アドラーの比重は個人の歴史に置かれている。これに対してヤスパースは集団の歴史をも同様に重大視している。

ヤスパースが大衆に批判的である理由は、人間の精神性の退廃にあった。精神性は精神の交わりにおいて獲得される内実である。そしてこの精神の交わりは実存的交わりの試金石にすらなっている。精神の交わりの具体例のひとつとして、ヤスパースは教養を思い描いている。教養を備えていない者が実存的交わりを遂行

したとしても、乏しい成果しかもたらすことができず、実存的連帯からほど遠い大衆の同調へ陥る危険すら生じてしまう。「真の歴史性は、あらゆる生に、このために現在の生にも栄養を与える源泉を見つけるための準備である」[Jas31, 107]。歴史は過去についての単なる知識ではなく、将来へと開かれた現在の実践のための学である。そしてこの開かれた実践の準備として、「控え目な生活態度の実直さ」[Jas31, 108]が指摘される。歴史的な伝承や伝統は、自分自身という存在の形式を積極的に与える。そしてこれは同時に、自分自身の存在を相対化させる契機でもある。この自己は反省を媒介に消極的に形成される。こうした反省を介した慎重な態度こそが、大衆社会において批判的に思考するための有効な手段なのである。

実存的交わりは、大衆的な同調を回避しながら連帯の可能性をひらく。他者は連帯可能な仲間である。この連帯は、仲間への問いかけと仲間と共同する自分自身の問いかけに支えられている。この問いかけは歴史的な相対化によって十全に遂行される。歴史は、われわれが誰であるのかという存在の問いだけでなく、われわれはどう生きるのか、どう生きたいのかという実践的な問いにおいても意味的である。そしてこれこそが、飛躍等の実践を重視する実存哲学が、歴史に価値を認める理由なのである。

参考文献

下記の表は著者名の頭文字をアルファベット順にして作成した。引用時は、著者名の省略形と公刊年の下二桁を組み合わせた記号とページ数順で記した。

- [Adl69] Alfred Adler, *The science of living*, Edited and with an Introduction by Heinz L. Ansbacher, Anchor Books, 1969.
- [Adl07] Alfred Adler, *Menschenkenntnis (1927)*, Alfred Adler Studienausgabe Bd. 5, hg. v. Jürg Ruedi, Vandenhoeck & Ruprecht, 2007.
- [Adl13] Alfred Adler, "Salvaging Mankind with Psychology [1925]", in: *Journal Articles: 1921-1926*, The Collected Clinical Works of Alfred Adler, Vol. 5, New Translations by Gerald L. Liebenau, Edited by Henry T. Stein, The Classical Adlerian Translation Project, 2013.
- [Dre50] Rudolf Dreikurs, *Fundamentals of Adlerian Psychology*, Alfred Adler Institute, 1950.
- [Fuk01] 福井一光 『人間と超越の諸相——カール・ヤスパーズと共に——』理想社、二〇〇一。
- [Ho194] Edward Hoffman, *The drive for self: Alfred Adler and the founding of individual psychology*, Foreword by Kurt A. Adler, Addison-Wesley Publishing Co., 1994.
- [Jas31] Karl Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, Walter de Gruyter & Co., 1931.

[Jas32] Karl Jaspers, *Existenzethologie (Philosophie 3Bde., Bd. 2)*, Julius Springer, 1932.

[Kis9] 岸見一郎、『アドラー心理学入門 よりよい人間関係のために』KKベストセラーズ、一九九九。

[Mat15] 松丸啓子、『現代精神医学におけるヤスパーズの『精神病理学総論』の意義』『高千穂論叢』Vol. 50(1), pp. 267-284, 2015.

[Sal85] Kurt Salammun, *Karl Jaspers*, Verlag C. H. Beck, 1985.

注

- (1) 共同体感覚についてドライカースは協力のための能力と捉えなおし、これを所属と関連づけている。「共同体感覚は、他者との共有や一員という意識において主観的にあらわれる。外見の上からゆる相違にもかかわらず、他人と根本的には違っていないと感じる時にのみ——所属を感じる時にのみ——ひとは協力のための能力を発達させることができる」[Dre50, 5f].
- (2) アドラーとヤスパーズの共通点は他にもある。たとえば医療の現場において、仲間意識の育成がカウンセリングの核心であるとアドラーが見なしていたのと同様、ヤスパーズもまた自身の実存的交わりもまた治療の場において重要であると考えた[Mat15, 276f].

(よしだ・しんや 立正大学非常勤講師)